神田外語大学大学院紀要　言語科学研究　第27号（2021）【研究ノート】pp. 167-180

「動詞連用形＋をしている」構文について

藤巻　一真
（神田外語大学）

要旨

小野（2014, 2020 ）で論じられた「Nをする」の形式を取るものの中に「Nをしている」となり、属性叙述を表す構文がある。佐藤（2003）、影山（2004）にて詳しく論じられた「青い目をしている」構文や、藤巻（2020）で分析された「V-方をしている」構文などがそれである。これらは、いずれもNの前の形容詞相当句（例えば「青い目」における「青い」）が必要であることが、これまでに観察され、影山（2004）においては、「NがAだ」という属性叙述を含むからとされ、形式と意味のミスマッチが生じているとされる。本稿は、これら2つの構文に追加して、「動詞連用形＋をしている」構文を、同様の特徴を示す例として提出し、西尾（1961）の連用形名詞の意味の分類に基づき、どの意味の連用形名詞がこの構文を許すか、また、可能な場合にどのような叙述が関与するかについて記述する。これにより、影山（2004）でいう意味と形式のミスマッチの新たなタイプが追加され、その分析の適用範囲が広がることになる。

キーワード：属性叙述、動詞連用形、「青い目をしている」構文、「方をしている」構文

1．はじめに

「青い目をしている」構文と呼ばれる（1b）のような文があり、佐藤（2003）でその意味的な特徴が、影山（2004，2009，2012他）では意味的特徴に加えて統語的特徴も明らかにされている[1]。

（1）　a. 太郎は（その時）鋭い目をした。
　　b. 太郎は（*今日は）青い目をしている。
　　c. 太郎は｛生まれつき/今日は｝優しい目をしている。

影山（2004）では、（1）の各文は、それぞれの叙述に関して異なるとされる。先ず、益岡（1987）における叙述の区別と同様に、「事象叙述」と「属性叙述」を区別する[2]。影山（2012: 3）によれば、事象叙述文とは「出来事・動作・行為・変化・動き・一時的状態などの発生や継続、終了」を表す文のことであり、一方、属性叙述文とは、「典型的には主語ないし主題として現れる名詞（句）がもつほぼ恒常的に安定していると思われる特徴・特性・属性・性質など」を表す文である。

これによると、(1a)は太郎に関する一時的な事柄の事象叙述文であり、(1b)は、主語（主題）である「太郎」の基本的に時間とともに変化しない目の属性を述べている属性叙述文である。この（1b）の類いを、佐藤（2003）や影山（2004）にならって、「青い目をしている」構文と本稿でも呼ぶこととする[3]。（2c）は両義的であり、太郎の生まれつきの目の特徴を述べることもできれば、その時の（一時的にそうであった）状態を表すこともできる。このように、この構文において叙述の種類を決めているのは、ヲ格名詞によるとされる（影山（2012））[4]。

この構文が興味深いのは、影山（2004）によると、この「青い目をしている」構文における形式と意味のミスマッチがあり、形式的には「～をしている」という動詞を用いた文であるが、意味的には「目が青い」という属性叙述が、ヲ格名詞句「青い目」に含まれるとされる点である。また、これに関連して、（1）の何れの例においても、（2）が示すように「目」の前の形容詞を省略することはできない点が観察されている[5]。

（2） a. 太郎は（その時）＊（鋭い）目をした。
b. 太郎は（*今日は）＊（青い）目をしている。
c. 太郎は｛生まれつき/今日は｝＊（優しい）目をしている。

この「青い目をしている」構文と同様の特徴を持つ他の例として、藤巻（2020）では、（3）に挙げるような「方をする/している」の形式を持つ構文が取り上げられ、その統語的特徴と意味的特徴が「青い目をしている」構文と比較されながら記述されている。（以下では、「青い目をしている」構文に合わせて、「方をしている」構文と呼ぶことにする[6]。）

（3） a. この山は厳かなそびえ方をしている[7]。
b. その世界は理想的なあり方をしている。
c. このおもちゃは変な壊れ方をしている。
d. このくつはひどい汚れ方をしている。
e. 太郎は面白い話し方をしている。
f. 花子は妙な考え方をしている。

この構文においても、「そびえ方」や「あり方」の直前にある「厳かな」や「理想的な」は必須要素であり、省略することはできない（井上（1990）、影山（1993））。そのことから、やはり、この構文においても「その世界のあり方は理想的だ」のような属性叙述が関与していると分析されている。

本稿では、このように「Xは、AのNをしている」という形式を取りながらも、「XはNがAだ」という（属性/事象）叙述が関与する2種類の構文以外にどのようなタイプがあるかという問いに対して、ひとつ新たなタイプを追加し、その特徴を記述することを目的とする。

そのもうひとつのタイプとは、「方をしている」構文と同様に、動詞が関与する例であり、以下の様に動詞の連用形がNになり、「Xは、AのN（動詞連用形）をする/している」となるものである。

（4） a. この川は穏やかな流れをしている。
b. この絵はすばらしい仕上がりをしている。
c. 太郎は大人っぽい喋りをしている。
d. 花子は面白い考えをしている。

以下、セクション2では、「青い目をしている」構文と「方をしている」構文に関与する叙述の特徴を概観する。次にセクション3において「動詞連用形＋をする/している」について、どのような意味を持つ動詞連用形がこの構文に現れるか、また、その時にどのような叙述が関与しているかを記述する。

２．先行研究：「青い目をしている」構文と「方をしている」構文

2.1 「Nをする」における位置

「青い目をしている」構文や「方をしている」構文は、「Nをする」構文（小野（2014，2020））の中の一部であるということを確認しておく。

小野（2014）では、以下のタイプを取り上げ、生成語彙論の枠組み（Pustejovsky（1995））で分析を行っている。（以下の例は、小野（2014：19-20）のそれぞれのタイプから一つ例を取り上げて掲載）

（5） a. 出張をする：動名詞＋をする
b. テニスをする：スポーツを表す名詞（事象名詞）＋をする
c. 怪我をする：経験を表す名詞（事象名詞）＋をする
d. 忘れ物をする：（出来事/個体）＋をする
e. ネクタイをする：衣類/着脱物（個体）＋をする
f. 警察官をする：社会的な役割を表す名詞（個体）＋をする
g. 青い目をしている：個体の属性を表す形容詞＋身体名詞＋をしている

先ず、「青い目をしている」は個体の属性を表すとされる。藤巻（2020）で述べたように、この分類には、「方をする/している」は、含まれていないが、形式的には、「動詞＋N（方）をする/している」であるので、「動詞＋N（もの）をする」である「忘れ物をする」と同類である[8]。一方、意味的には「太郎は面白い考え方をしている」は、太郎の属性を表し、「青い目をしている」と同類となる。つまり、「方をしている」構文は、形式は（5d）の特徴を持ち、意味的には、（5g）の特徴を持つと言え、（5）において新たな類を成すと言える。

2.2 「青い目をしている」構文と「方をしている」構文の叙述について

この二つの構文において重要なのは、影山（2004）で論じられているように属性叙述が関与している点である。そして、関与する名詞の前の形容詞の類いは必須であり、名詞からすると（7）にあるように述語と解釈される点である。（（a）は影山（2004）より）

（6） a. 彼女は*（澄んだ）目をしている。　（影山2004：23）
b. そのくつは*（ひどい）汚れ方をしている。

この修飾語が必須であるというのは、「澄んだ目」や「ひどい汚れ方」において、「澄んだ」や「ひどい」は、形式上は連体修飾の形であるが、この部分と名詞の意味関係は（7）の文に対応し、「目が澄んでいる」や「汚れ方がひどい」というように「Y（名詞）」を主語とし「X（形容詞など）」が述語という関係があることによる。

（7） a. 彼女は目が澄んでいる。
b. そのくつは汚れ方がひどい。

これは影山による重要な考察であり、「青い目をしている」構文において「形式と意味のミスマッチ」が生じていると分析されている[9]。藤巻（2020）で分析された「方をしている」構文においても、同様と言える。

また、ここでの主語と述語の関係は、属性叙述文のそれであり、一時的な状態を表す「今だけ」や「瞬間」などの副詞と共起しないとされる[10]。（以下、影山（2009）から）

（8） a. *彼女は今だけ青い目をしている。
b. *彼女はその瞬間青い目をした。

「方をしている」構文においても、以下が示すように関与する叙述は属性叙述である。

（9） a. *そのくつは今だけひどい汚れ方をしている。
b. *そのくつはその瞬間ひどい汚れ方をした。

以上、「青い目をしている」構文と「方をしている」構文において属性叙述が関与している点と、形容詞の類いの連体修飾語句が、修飾される名詞から見ると述語と考えられ必須要素であることを見た。

3.「動詞連用形＋をしている」構文

本セクションでは、「動詞連用形＋をしている」について、そこに関与する動詞連用形の意味と叙述について見ていくことにする。

3.1　動詞連用形の意味と「動詞連用形＋をしている」構文の位置

動詞の連用形は、一般的に名詞として使用され得る。西尾（1961）によれば、以下のような意味がある[11]。（その他に、「動作・作用の所産・結果」（例：「包み」「蓄え」）や「動作・作用の主体/客体」（例：「見習い」/「つまみ」）や「動作・作用の手段」（例：「はかり」「はたき」）などが挙げられている。以下の例は西尾に挙げられているものの一部を掲載。）

（10）a. 動作・作用そのもの
　　例：泳ぎ、調べ、貸出、繰り上げ
　　b. 動作・作用の内容
　　例：考え、教え、望み、願い、悩み、祈り
　　c. 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど
　　例：金使い（が荒い）、滑り（がいい）、売れ行き（がすごい）
　　出来（米の＿）、当たり（が柔らかい）
（西尾（1961：70））

西尾（1961：63）は、これらを「連用形名詞」と呼び、連用形修飾語ではなく連体修飾語を取ることができ、アクセントの型ももとの動詞と異なるものがあるとする。この呼び方からも明らかであるが、これらは名詞として機能していることになる。

次に、（5）にあげた小野（2014）の分類のどこに、例えば「この川は穏やかな流れをしている」が収まるかというと、連用形名詞を用いる点において、形式的には、（5a）の「動名詞＋をする」になるであろう[12]。しかし、意味的には以下で見るように（5g）の「青い目をしている」と同様に属性を表していると考えられる。そうすると「方をしている」構文と同様に、形式と意味がミスマッチを起こし、（5）における新たな類を成すと言える。

3.2 「Nをする」における連用形名詞の意味

ここでは、この構文に関わる「連用形名詞」の意味について見てみる。先ずは、西尾（1961）の分類の「動作・作用そのもの」は、以下のように「Nをする」構文に生起可能であり「する」も「している」も可能である。（11）のどちらの例においても動作と解釈され、「している」においては、動作進行の解釈が可能である。つまり、関与する叙述は事象叙述である。（（11b）の「している」は、次の節で述べるように属性叙述の解釈もある。）

（11）a. そのロボットはおかしな腕の動きをする/している。
　　b. 太郎は大人っぽいしゃべりをする/している。

次に「動作・作用の内容」であるが、次のように「している」が可能である。この「考え」は考えた内容のことである。この場合、「する」は難しいように思われる。

（12）太郎は面白い考えを｛?*する/している｝。

次に「動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じ」について見てみる。以下の様に、基本的には「している」とは共起可能であるが、「する」とは合わないようである。

（13）a. この川は穏やかな流れを｛*する/している｝。
　　b. 花子の歌声は心地よい響きを｛*する/している｝。

これらは、（14）の様に「方をしている」や「具合をしている」で置き換えられる。

（14）a. この川は穏やかな流れ方をしている。
　　b. 花子の歌声は心地よい響き具合をしている。

その他、「動作・作用の主体」は、（15）のように「する」と「している」の両者が可能である。

（15）a. 太郎は見習いをする/している。
　　b. 太郎は受け付けをする/している。

ただし、これらは連体修飾語が不要という点で、これまでの例とは違いを見せている。（11）から（14）においては、（16）にあるように、連体修飾語が必須であり、この点はこれまでの「青い目をしている」構文や「方をしている」構文と同様である。

（16）a. 太郎は*（大人っぽい）しゃべりをしている。
　　b. 太郎は*（面白い）考えをしている。
　　c. この川は*（穏やかな）流れをしている。
　　d. 花子の歌声は*（心地よい）響きをしている。

また、（15a）の「太郎」と「見習い」の間に、「太郎は青い目をしている」「太郎は面白い考え方をしている」「この川は穏やかな流れをしている」において見られる、主題と名詞の間にある所有関係（例:「この川」と「流れ」の所有関係）がない点も、異なる[13]。そこで、（15）は以下で叙述について考察する対象からは外すこととする[14]。

3.3　関与する叙述について

前節では連用形名詞の意味について西尾（1961）の分類を基本として観察してみたので、本節ではそこに関与する叙述について見てみることにする。

先ず、前節において、「する」が可能であった場合であるが、これは「方をする」と同様に、事象叙述と考えられる。いずれも過去形にして過去の動作や、「ている」形で進行中の動作を表している。（17b）の「ている」は、属性叙述の解釈もある[15]。

（17）a. そのロボットはおかしな腕の動きを｛した/している｝。
　　b. 太郎は大人っぽいしゃべりを｛した/している｝。

次に、「考え」が「考えた内容」であるとすると、「面白い考えをした」とは言

えないように思われる。この場合の「考えをしている」は太郎の属性叙述と考えられる。

（18）太郎は面白い考えを {*した/している}。

次に、「動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じ」であるが、まず、「する」は不可能であり、そこから「した」も不可能である。つまり、事象叙述とは言い難く、属性叙述ということになる。例えば、（19b）は、「この川」の属性として「流れが穏やかだ」ということである[16]。

（19）a. *この川は穏やかな流れをする/した。
　　b. この川は穏やかな流れをしている。

（20）a. *花子の歌声は心地よい響きをする/した。
　　b. 花子の歌声は心地よい響きをしている。

その他の属性叙述の例として、以下のようなものがある。

（21）a. この絵はすばらしい出来をしている。
　　b. 花子の歯はきれいな並びをしている。

これらの例においては、例えば「響き方」「響き具合」「並び方」「並び具合」と言えることからも、これらは、「動作・作用そのもの」ではないことが分かる。

（22）a. この川は穏やかな流れ方をしている。
　　b. 花子の歌声は心地よい響き方/具合をしている。

（23）a. この絵はすばらしい出来具合をしている
　　b. 花子の歯はきれいな並び方/具合をしている。

以上、動詞連用形の意味をもとに、「動詞連用形＋をしている」構文における

叙述について見てきた。この構文は「青い目をしている」構文および「方をしている」構文と、叙述に関して同様の特徴を示し、属性叙述が関与していると言える。

4．まとめと今後の課題

本稿では、属性叙述が関与する構文として、佐藤（2003）、影山（2004）で詳しく分析された「青い目をしている」構文と、藤巻（2020）で同様の特徴を示すとされた「方をしている」構文に、もうひとつ新たに、属性叙述が関与するものとして「動詞連用形＋をしている」構文を追加した。その際、西尾（1961）による、動詞連用形が名詞として用いられるときの意味分類をもとにどのタイプが属性叙述に用いられるかについて観察した。

本稿は、「動詞連用形＋をしている」構文の叙述に関する記述を行い、影山（2004）における「形式と意味のミスマッチ」が生じ、この意味で、他の二つと同類を成すことを示すのが中心であったので、3つの構文に共通の属性叙述について、どのように導き出すかという理論的な課題が残っている。これまでの「青い目をしている」構文については、主に2つの分析がある。ひとつには影山（2004）における語彙概念構造による分析がある。もうひとつには、「Nをする」を生成語彙論の枠組みで分析した小野（2014，2020）がある。どちらの分析で、「方をしている」と「動詞連用形＋をしている」の2つの構文が、どこまで捉えることができるかについては、今後の検討課題とする。

謝辞

本稿は藤巻（2020）における「方をする」構文を考察している中で浮上してきたもので、全体としては「Nをする」という形式を持つが、その叙述に関しては、事象叙述と属性叙述の両者を併せ持つ構文と言える。まず、この「方をする」に目を向けることになったのは、長谷川信子先生と名詞化について議論をする機会を得たことが大きい。ひとつの小さなことを話しすると大きな視点から多くのことを与えて下さる。ここに記して感謝申し上げる。査読者の岩本遠億氏と遠藤喜雄氏からは、貴重なご意見とご批判を頂いた。また、上田由紀子氏と大倉直子氏にも、貴重なご意見を頂いた。本研究の一部は、神田外語大学言語教育研究所の研究プロジェクトの助成を受けている。ここに記して感謝申し上げる。本稿における誤り等は全て筆者に責任がある。

注

1. 影山（1980, 2008, 2009, 2012）、角田（1991）、澤田（2001）なども参照されたい。
2. 本稿でも、この2種類の叙述文について以下の区別を仮定して論を進めることにする。（定義は益岡（2000）から）
   （ｉ）属性叙述：ある対象がある属性（特徴や性質）を有することを表現するもの
   （ii）事象叙述：ある時空間に実現・存在する事象（現象）を表現するもの
   （益岡（2000: 39））
3. 「青い目をしている」（型）構文と呼ばれ、佐藤（2003: 22）において、この構文を可能とする意味的な特徴として以下のように述べている。（下線部は佐藤による。）
   「青い目をしている」型構文はとらえられた対象の根源的属性を述べるものであると考える。「根源的属性」とは、対象XがXとして成り立つ以上は常に有されるXの内在的な属性であり、Xの成立後に外的に付与される可能性のないものである。
   （ｉ）*太郎は黒くて大きな鞄をしている。（佐藤（2003））
   （ｉ）において「鞄」は太郎の根源的属性ではないので、この構文は許されない。
4. 小野（2014）は、生成語彙論の枠組みで、このヲ格名詞句の特徴は、身体部位の名詞のみでなく、「形質名詞」と呼ばれるようなタイプのものであり、それを表すのは特質構造の形式役割であるとし、そこから形質名詞の属性が、「強制」によって読み取られると分析する。
5. 村木（1970）において機能動詞結合を論じる際に、以下の例が挙げられ、「する」以外にも以下のような「とる」も挙げられていて、これらは、ヲ格名詞句に何らかの修飾語句が必須であるという特徴を示すとされている。
   （ｉ）～顔 をする、～思いを/がする、～色をする、～形をする
   （ii）～態度をとる、～姿勢をとる
   「方をしている」構文における何らかの修飾語句が必要な点は、井上（1990）、影山（1993）で指摘されている。
6. 藤巻（2020）では、「方をしている」のみが可能な場合も含めて、「方をする」構文と呼んでいる。「青い目をしている」にあわせるならば、正確には「方をしている」のみが可能な属性叙述の場合にのみ「方をしている」構文と呼ぶべきかと思われる。
7. 査読者の遠藤喜雄氏より、(3）及び（4）の例について、非能格動詞の場合は問題ないが、筆者が挙げている例は、良くないとの判断を頂いた。筆者には、これらの例は、以下の例も含めて特に不自然さは感じられない。
   （ｉ）花子は素敵な育ち方をしている。
   （ii）このトマトは面白いなり方をしている。（藤巻（2020））
   　また、筆者が文法判断を尋ねた話者によると、「理想的なあり方をしている」などは、少々不自然さが感じられるが非文法文ではないとする。動詞の種類が関与しているよう

に思われるが、この点は今後精査が必要である。

8. 「忘れ物をする」については、杉岡（2018，2020）に分析がある。杉岡（2018）では、小野の分析の問題点も指摘し、「複合名詞が事象解釈を持つ場合に左側の動詞要素が主要部として解釈され［る］」（p.60）とする分析を提出している。詳しくは、杉岡（2018, 2020）を参照されたい。また、小野（2020）における新たな分析も参照されたい。
9. この点について、影山（2012: v）において以下のように述べている。
名詞述語文、形容詞文、動詞文の区別に関わりなく属性叙述文の意味解釈が“X is P.”というコピュラ文に相当する抽象的な意味構造に収斂する可能性を示唆する。
10. 査読者の遠藤喜雄氏から「彼女は、先週カラーコンタクトレンズで青い目をしていた」とすると良くなるとのご指摘を頂いた。この場合は事象属性となり、彼女の通常は変化しない属性とは異なり、属性叙述ではないからであると考えられる。この例においては、彼女がもともと違う目の色をしていることが暗示されている。
11. 連用形名詞の形態や意味については、伊藤・杉岡（2002）、金（2003）、沈（2013）などを参照されたい。伊藤・杉岡（2002: 93, 93）においては、事象に言及するものと具体物に言及するものに分けられるとし、前者には、「行為・出来事」「程度」「結果状態」を挙げている。また、後者には「内容」「結果産物」「動作主」「主体」「道具」「対象」「場所」を挙げている。この2種類において、名詞化される際に取り立てられるものが異なると分析される。詳しい分析は、伊藤・杉岡（2002）を参照されたい。
12. 「面白い動きをする」などは、動作を表し「面白い動作をする」と同義であり、「動名詞＋する」の類いと考えられる。ただし、後述のように「青い目をしている」と同様に、名詞の前の形容詞（「面白い動き」における「面白い」）などを略すことはできない点では、（5a）とは形式的にも異なる。尚、「このロボットは面白い動作をした」においても、「面白い」を略すことができないと思われる。この点は、「そのロボットは移動した」とは異なる叙述が関与していると言える。「形容詞＋動名詞＋をする」については、別の機会に検討することとする。
13. 査読者の岩本遠億氏から、この所有の関係は、動詞の連用形を用いている以上、もとの動詞にはその項が必要であるからであるとご指摘頂いた。この点は、「方をしている」構文においても同様であり、動詞が「方」の前に来る以上は、その項が、主語として現れていることになる。
14. その他に、西尾（1961）に動作・作用の「手段」「目標」「場所」「時」なども挙げられているが、以下のような例は、今回は考察対象から外し、今後の検討課題とする。
（ｉ）?この街は、素晴らしい通りをしている。　「通り」は「場所」
（ii）?今朝は素敵な夜明けをしている。　「夜明け」は「時」
15. 「ている」が「ていた」となっても属性の解釈は、「青い目をしている」と同様に、変わらないと思われる。回想しながら、主題の属性を述べていると言えるであろう。

（ⅰ）太郎は青い目をしていた。
（ⅱ）太郎は面白い考えをしていた。
（ⅲ）そのくつはひどい汚れをしていた。

16. 査読者の岩本遠億氏から「この川は今日は穏やかな流れをしている」と言えることから「太郎は青い目をしている」とは異なるとの指摘を頂いた。注の10と同様に、この例は「今日」の一時的な属性であり（その意味では事象叙述と分類され）、普段は異なること（例えば普段は「この川は、荒々しい流れをしている」という属性叙述）を暗示していると言える。

参照文献

藤巻一真（2020）「「方をする」構文―意味と統語の記述を中心に―」『神田外語大学紀要』32, pp. 19-39. 神田外語大学.
井上優（1990）「接尾辞「～方」について」『日本語学』9, pp. 101-111.
伊藤たかね・杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』東京：研究社.
影山太郎（1980）『日英比較　語彙の構造』東京：松柏社.
影山太郎（1993）『文法と語形成』東京：ひつじ書房.
影山太郎（2004）「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4（1）, pp. 22-37.
影山太郎（2008）「属性叙述と語形成」益岡隆志（編）『叙述類型論』pp. 21-43. 東京：くろしお出版.
影山太郎（2009）「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136, pp. 1-34.
影山太郎（2012）「属性叙述の文法的意義」影山太郎（編）『属性叙述の世界』pp. 3-35. 東京：くろしお出版.
金美淑（2003）「連用形名詞」『日本語論究７』pp. 299-320. 大阪：和泉書院.
沈晨（2013）「日本語連用形名詞の自立性の段階について」『第4回コーパス日本語ワークショップ予稿集』pp. 151-158. 国立国語研究所.
益岡隆志（1987）『命題の文法―日本語文法序説―』東京：くろしお出版.
益岡隆志（2000）「属性叙述と事象叙述」『日本語文法の諸相』pp. 39-53. 東京：くろしお出版.
村木新次郎（1970）「日本語機能動詞の表現をめぐって」国立国語研究所報告　65『研究報告集Ⅱ』pp. 17-75. 国立国語研究所.
小野尚之（2014）「「Nをする」構文における項選択と強制」岸本秀樹・由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』pp. 27-40. 東京：ひつじ書房.
小野尚之（2020）「軽動詞構文における強制と共合成―「する」と「ある」をめぐって―」『名詞をめぐる諸問題―語形成・意味・構文―』pp. 88-108. 東京：開拓社.
Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

佐藤琢三（2003）「「青い目をしている」型構文の分析」『日本語文法』3（1），pp. 19-34.
澤田浩子（2001）「属性の階層性とテイル構文―事象叙述から属性叙述へ―」『日本言語学会第122回大会予稿集』
杉岡洋子（2018）「複合名詞の事象解釈をめぐる考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』49, pp. 45-62. 慶応義塾大学.
杉岡洋子（2020）「「動詞連用形＋名詞」複合語の多義について」『名詞をめぐる諸問題―語形成・意味・構文―』pp. 2-23. 東京：開拓社.
角田太作（1991）『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.